

Title	カルミデス篇におけるソクラテスの産婆術と教育：ソフロスナー、克己節制(健全なる思慮)への教育
Sub Title	Socratic midwifery in Carmides
Author	東, 敏徳(Azuma, Toshinori)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2012
Jtitle	哲學 No.129 (2012. 3) ,p.165- 187
JaLC DOI	
Abstract	<p>Carmides is an early piece of Plato. It offers a positive dialogue of Socratic method, and it substantiates the effectiveness of Socratic midwifery(maieutic) strategy for education. The first rule of educational midwifery is not to hand the right answer to one's interlocutors, but to enable them themselves to give birth to the right answer from their own inner resources.</p> <p>In this article, I will show that Socratic conversation in Carmides makes clear the structural framework of his method. In the first part of this article, I will concentrate on the characteristic of Carmides in the Plato's works. Carmides is written in a spirit of open-minded inquiry which is typically Socratic in the early dialogue, without at any point presupposing Plato's characteristic middle-period doctrines. In the second part, I will analyze the theme of Carmides about knowledge of knowledges. Socrates' way of labelling the word 'knowledge' is to link it to 'possessing' something as opposed to 'having' it in comparison with Critias' way. In the third part, I will conclude that the knowledge of knowledges is the foundation of midwifery method.</p>
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000129-0165">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000129-0165</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

# カルミデス篇におけるソクラテスの 産婆術と教育

—ソフロスナー，克己節制（健全なる思慮）への教育—

— 東 敏 徳\*

## Socratic Midwifery in *Carmides*

*Toshinori Azuma*

*Carmides* is an early piece of Plato. It offers a positive dialogue of Socratic method, and it substantiates the effectiveness of Socratic midwifery (maieutic) strategy for education. The first rule of educational midwifery is not to hand the right answer to one's interlocutors, but to enable them themselves to give birth to the right answer from their own inner resources.

In this article, I will show that Socratic conversation in *Carmides* makes clear the structural framework of his method. In the first part of this article, I will concentrate on the characteristic of *Carmides* in the Plato's works. *Carmides* is written in a spirit of open-minded inquiry which is typically Socratic in the early dialogue, without at any point presupposing Plato's characteristic middle-period doctrines. In the second part, I will analyze the theme of *Carmides* about knowledge of knowledges. Socrates' way of labelling the word 'knowledge' is to link it to 'possessing' something as opposed to 'having' it in comparison with Critias' way. In the third part, I will conclude that the knowledge of knowledges is the foundation of midwifery method.

---

\* 聖徳大学幼児教育専門学校

## 序

カルミデス篇は、文体統計研究の成果によると、ソクラテスの弁明篇、クリトン篇、ラケス篇、リュシス篇、エウテュプロン篇といった一連の初期作品群と共通していることが明らかになっている<sup>1)</sup>。また、カルミデス篇は初期作品群に共通する特徴である、結論に到達することが出来ず、「何も知らなかった」という結論で終わるといった終わり方をしている。すなわち、克己節制、ソフロスネー、が何であるかは見つけだせない(175C)というアポリアに行き着いたところで議論が終了している。この終わり方は、初期作品群に共通して見られるものであり、この両者から、すなわち、文体と内容的な特徴とのいずれの面からも、この対話篇はソクラテスを中心とするプラトン著作群の初期の系列に属することは明らかである。

しかし、カルミデス篇の主題は知を探究対象としている。知の問題は中期作品以降、例えば、その可能根拠を問題とするメノン篇、さらには、その本質や意味を包括的に明らかにする国家篇、テアイテトス篇、ティマイオス篇等の諸著作のなかに集中している。初期作品群の中では、勇氣、友愛など徳を主題としており、知が直接的に問題にされた初期対話篇は、カルミデス篇を除いて他にはない。

この点で、カルミデス篇は初期対話篇の中でも特徴的な位置を持つと言える。それはソクラテスがソフロスネー、克己節制という徳についての議論を通じて知の意味を明らかにしていくという点である<sup>2)</sup>。しかも、ソフロスネーを主題とすることで、道徳性について吟味しつつ、知と徳との関わりも示している。すなわち、カルミデス篇でソクラテスは、ソフロスネーを自他について、何を知り、何を知らないかを自覚していく吟味の姿勢であるとする。そこからさらに、ソフロスネーという道徳的姿勢を、相互批判という吟味を促しながら手ほどきしていくという、産婆術を実践し

ているのである。

本稿の目的は、カルミデス篇を、ソクラテスの産婆術という教育実践の特徴を端的に示す作品の一つとして考え、そこからソクラテスの考える徳の教育について——そこには知についての理解が中心となる——を明らかにするところにある<sup>3)</sup>。そして、知を吟味の営みとして捉え、吟味の姿勢を保つことがソフロスネーであると主張する。ソクラテスの吟味が、対話相手の知の中に分け入りながら、知らないことを知らないと思うという理解へ導くものであると主張する。そこから、さらなる知への探求へと、対話相手を誘い、自己吟味の道徳的姿勢を生み出すという、産婆術の過程であると結論づける。

## I

まず、対話の前半部で展開される、カルミデスから始められるソフロスネーについての主張を検討する。これにより、ソフロスネーが前五世紀のアテナイ社会の中でどのように理解されていたのかについて示す。

カルミデスはソクラテスとの対話の中で、ソフロスネーの三つの定義を順に提出する。まずソフロスネー、克己節制は、最初に、秩序を守り粛々と遂行すること、すなわち「物静かさ *ἡσυχιοτής* (159B)」と定義され、次に不名誉な行いに対して「恥を知る心 *αἰσχυνηλόν* (160E)」、第三に、他者に干渉せず、己の分を守り、「自分のことだけをする *ἐαυτοῦ πράττειν* (161B)」と定義されて、順次調べられていく。しかし、カルミデスによって提出された三つの定義はいずれも、ソクラテスにより論駁されてしまう<sup>4)</sup>。

以上のカルミデスの定義は、すべて当時のアテナイ社会の伝統的な概念に基づくものであった。それだけに、そこにはソフロスネーという徳に対する常識的な捉え方しか現れていない。最後に提出された定義、ソフロスネーは「自分のことをする」ことであるという理解は、社会における自ら

の役割に専念し、それ以外のことには余計な口出しをしないという心得として上げられる。物静かき、恥を知る心という解釈も、そこから生じる。しかし、第三の候補は、あらゆる行為が、必ず他者の事柄に関わらねばならない点を、ソクラテスにより指摘されて反駁される。その結果、第一、第二の候補も退けられることになる。

続けて、対話相手となっていたカルミデスと交代したクリティアスが、ソフロスネーについての議論を引き継ぐ。この後から、カルミデス篇の主題、ソフロスネーがクリティアスとソクラテスとで二つの異なる意味で用いられていく。まずクリティアスの言うソフロスネーの意味を明示する。

クリティアスは「ソフロスネーは自己知識の形式である *σωφροσύνην εἶναι τὸ γινώσκειν αὐτὸν ἑαυτὸν* (165B)」と言う。すなわち、ソフロスネーとは「他のいろいろな知についての知であるばかりか、それ自らについての知でもある *ἢ δὲ μόνη τῶν τε ἄλλων ἐπιστημῶν ἐπιστήμη ἐστὶ καὶ αὐτὴ ἑαυτῆς* (166C)」とクリティアスはする。そこからソフロスネーを持つとは、すなわち、自分自身についても知ることになり、「何を知っているかについて知っていないかについて知っていること *ἔστι δὲ τοῦτο τὸ σωφρονεῖν τε καὶ σωφροσύνη καὶ τὸ ἑαυτὸν αὐτὸν γινώσκειν, τὸ εἰδέναι ἅ τε οἶδε καὶ ἅ μὴ οἶδεν* (167A)」と確認される。

クリティアスにとり、この知は相手が知識を確かに持っているかどうかを明らかにし、それによって、相手の能力を選別していくために役立つ。このために、クリティアスは知識を持っていないと知ることまでも知の中に組み入れ、それによって、知らないことまでも、客観的に知ることができるといふ知り方を提示する。換言すれば、クリティアスはソフロスネーに、知らないことを判定する能力を与え、相手が知識を持っているかどうか調べるための判定基準としての知、(教科書に記載されるような) 静的な固定した知という特徴を与える。この知は相手に対しても用いられるのと同様、自己にも向けられる。自分が知を持っているかどうか振り返り、

持っているなら相手より優越している。その分だけ持たないものより、社会に有意義に貢献しうる。すなわち、国家をうまく機能させることができ、政治的な優越さを持つことになる。

クリティアスはソフロスネーに対して、自己知識という解釈を与え、知ることそのものに関わる能力として、知識についての知という視点を導入する。そして、その知識の知に、他の様々な知の有無に関する判定能力を持たせる。その知を持って、他の人々が知識を持っているかどうか調査決定する権限を持たせる。

クリティアスはさらに、人々が持つ知識を、効用性から捉え、そこからもたらされる有益さの故に追求されるべき意味のある点を強調する<sup>5)</sup>。例えば、健康についての知識を持つことは有益であり、正しさについての知識を持つことは法を守ることになり、有益である。それらの知識を持つことにより、社会の中で生きていく上で、不利益や不当な扱いを被ることがなくなり、さらにはどの職業においても適材適所で、自分に合った仕事に就労できる。最終的には、知らないことに関わってしまうという失敗や損失から逃れることができる。結果的に、全体の利益が保証されていくことになる。

これに対し、ソクラテスは、自己知識は道徳的な行動をとる際の、知らないことについて知ることを含むと言う。その知り方は、知らないことを知らないと思うという吟味である。その吟味は、相互吟味という共同作業の過程そのものであり、ダイナミックなプロセスである。

クリティアスとソクラテスのソフロスネー解釈の差異はカルミデス篇における二人の自己知識の理解の違いも示している。クリティアスは有益さという面から解釈している。ソクラテスは自己吟味としてソフロスネーを解釈している。

クリティアスはソフロスネーの定義を「自分自身を知ること」とするが、この主張は、デルフォイの銘文「汝自身を知れ」による。クリティア

スによれば、この「汝自身を知れ」というのは神殿に参拝する人に対するアポロンの挨拶に他ならないのであるが、それはソフロスネーを持ってという命令と同じ意味なのであって、アポロンは謎めかして汝自身を知れと言っているとする(164E)。

ここからクリティアスにおいて、ソフロスネーは、自らの分を知り他人の領域を侵さないという弁えとしての自己知識を意味すると解釈される。そこにおける自己知識とは、自己の能力、あるいは社会的に果たすべき役割についての弁えのことである。訓戒としての意味は、社会における自己の位置、力の範囲と限界を知ることによって、余計な事柄に口出しをする横柄さを取り除き、自分に与えられた職務に徹するということになる<sup>6)</sup>。クリティアスにとっては「自分自身を知る」とは、自己知識(それは自分の限界を認識することとは異なる)、社会の中での役割を果たす自分について知っている、自分について分かっていることを意味する。つまり、クリティアスにとっての「自己知識」とは、「分」を知るという意味で、各々が自分の社会的役割を弁まえるために、自分についての情報を正しく持つことにある。この意味で、書物に書かれた知識のように、自分についてのデータを集め、それを系統的に比較整理したようなものである。

クリティアスにとり、ソフロスネーを有するものは、知っている事柄と知らない事柄について知っている点で、有利になる。なぜなら、ソフロスネーがあれば、自分たちの知らない事柄については自分でしょうとはせずに、知識のある人を見つけだしてその人に譲るであろうし、導かれるべき人々にも、正しくやれる範囲の事柄のみ行うことで、過ちを犯すことなくできるからである。またさらに、ソフロスネーを持つ自分自身だけでなく、十分なソフロスネーを持たないが故に、ソフロスネーを有する人から従わなくてはならない他の人々も、過失なく生きていくのであるからである。「そうなれば、ソフロスネーを持っている私達自身も私達に指導される他の全ての人も過失無く生きていけるようにできるからである。

ἀναμάρτητοι γὰρ ἂν τὸν βίον διεζῶμεν αὐτοὶ τε οἱ τὴν σωφροσύνην ἔχοντες  
καὶ οἱ ἄλλοι πάντες ὅσοι ὑφ' ἡμῶν ἤρχοντο (171D)』このようにして過失  
が取り除かれ、正しく導かれることであらゆる行為が立派によくなされる。  
ここから、「行いのよい人は幸福なのである。εὐ πράττοντας  
εὐδαιμόνας (172A)」という結論が導かれる。

クリティアスの考えるソフロスネーから、「知っていることと知らない  
ことを知る」ことで、自分と他人、それぞれが適所に配置されて正しく機  
能するようになる。それによって「有益さ」が実現されていく。ソフロス  
ネーを持つ者は、そのような配置の監督者としても有能であり、実質的な  
支配者の位置に立つことができる。

クリティアスは、このような「知っていることと知らないことを知っ  
て行うことによって実現する「正しさ」を「行いのよい」ことと同一視  
し、そこから幸福が獲得できると考える。知っていることを知っている者  
たちが主導権を持つことによって、社会の構成員全体で「よくやる」こと  
が出来るようになり、幸福な状態が実現する。これが、クリティアスがソ  
フロスネーを克己節制として肯定し、それによって支配権を持つ正当な理  
由になるとする<sup>7)</sup>。

ここにこそ、クリティアスがなぜソフロスネーを「知っていることと知  
らないことを知っている」として提示したのか、その理由が明らかにな  
る。それは、知っていることを知っているかどうか、知らないことも知っ  
ているかどうかを基準として、知を持っている人と持っていない人の選り  
分けをおこなう。知らないことを知っている人は、それだけ広い知を持  
ち、誤りを犯すことが少ない。そして、この選り分けから、人材を階層的  
に適材適所に配置、分配し、さらに過失のない、正しく導かれている社会  
を作ろうとする。ここで言うソフロスネーは、人間の能力を分類する知の  
有り様であり、それに則り、社会の中で個々人を自己制御させていく役割  
を与えられている。ソフロスネーはそのような社会を実現するために不可

欠な徳であり、国家をうまく機能させるために人々を適当な社会的位置に配置するという意味で、国家を取り仕切る働きを持つ<sup>8)</sup>。

## II

以上のクリティアスの有益さという面に基づくソフロスネーの位置づけに対し、ソクラテスは「まず調べた上でないと同意するかどうかは言いたくない *σκεψάμενος οὐδὲν ἐθέλω εἰπεῖν εἴτε ὁμολογῶ εἴτε μή* (165B)」と述べて吟味を行う。この探求の態度は、認知的自己規制であり、知らないことを知らないときちんと思っているかどうかを問い続ける、ソクラテスの基本の方針である。

先に述べたように、クリティアスは、「知っていることと知らないことを知っている」人がその本来の仕事をしてさえいれば、あとはその結果として、正しく配置されたそれぞれの人々が全体として誤りなく仕事を行い、その結果としてすべてのことが正しく行われる社会が自動的に構築されるとした。それに対してソクラテスは、それだけでは幸福実現の十分条件ではないことを明らかにする。すなわち、「知っていることと知らないことを知っている」という静的な知のあり方だけでは十分ではないと、クリティアスに反駁する。

「汝自身を知れ」という銘文については、クリティアスと異なり、ソクラテスは自己吟味、すなわち、「知っていないことを知れ」とするメタ認知を求める命令としてみる。前五世紀のアテナイ社会でソフィストが主張していた事物についての知識には、*episteme* (学知) と、*gnosis* (知ろうとすること) という二つがあるとされる。クリティアスが、この両者を区別しないのに対し、ソクラテスは *gnosis* という知識のあり方を強調する。*gnosis* とはソクラテスによれば、自らの意思のもと、理解を深めていく探求の知識であり、自己と他者を照らし合わせる、合理的探求と正当立証のプロセスを含むものである。これは自己のあり方と、知識の成立根

拠を問う理性の働きと関わる。この点は、前五世紀における自己知識についての見解をソクラテスが深めた点で、ソクラテスの独自の功績であるとされる<sup>9)</sup>。

ソクラテスは確認する。自己知識は理論的客観的知識とは異なる。「それぞれの知の対象は当の知そのものとはまさしく違う。例えば、計算の技術は偶数と奇数についての知であり、……しかもその奇数と偶数はその計算技術そのものとは違う *ὁ τυχάνει ὄν ἄλλο αὐτῆς τῆς επιστήμης· οἷον ἡ λογιστικὴ ἐστὶ πού τοῦ ἀριτίου καὶ τοῦ περιττοῦ...ἑτέρου ὄντος τοῦ περιττοῦ καὶ ἀριτίου αὐτῆς τῆς λογιστικῆς* (166A)」。また、何かを測るというという技術に関する知識は、その何かが重いか軽いかという一つ一つの個別の知識とは異なる種類の知識である。すなわち、自己知識とは、自分の有している知識に加えて、さらに自分の推論過程そのものに関わる。ソクラテスは自分自身を知るとは「かりそめにも知である以上、知らないことを知らないとする知 *ἀνεπιστημοσύνης ἐπιστήμη ἂν εἴη, εἴπερ καὶ ἐπιστήμης* (166E)」であると見なす。それは対話相手との吟味を通して、相手の無知の中に踏み込み、無知の自覚へと誘い、探求の意欲をもたらすものである。そしてダイナミックな知的活動への着火となり、動的で、自己批判的な活動となる。

クリティアスのいう自己知識は、技術者の知識や政治や行政に関する知識を対象としており、有用な知識である。しかし、それは自己批判を含まない知識である。もちろん技術者が自分の知識を省みて、その有効性を磨いていくということはある。刀鍛冶が自分の心身の鍛練まで含めて刀を磨くことはある。この場合でも、刀鍛冶は殺傷武器を作っている自分の仕事そのものを自己批判することはない。刀を鍛える仕事そのものが刀という殺傷能力のある武器を作ることであり、その製造の過程と結果を自己吟味し、武器生産を否定していくことは、自分の仕事の存在意味そのものの否定になるからである。

これに対し、ソクラテスの自己知識は人間が合理的存在であることを前提としている。それは自己存在のありかたそのものを問うていく。すなわち、自己吟味をソクラテスは求める。「知らないことを知らないとする知」は、単に自己の知的活動を後追的に観察するものではなく、むしろ自分を含め、自己吟味のただ中で、人が何かを知っていたり、知っていなかったりする事実を確かめる判別能力なのである。それゆえ、「知らないことを知らないとする知」は、自分の考えに対してでも向けられ、さらに他者の考えにまでも向けられるのである。それは人々を「知っていることと知らないこと」の多寡で人々の能力を判定しようとする知のあり方ではなく、自己も対象として、知らないという事実に対正する営みなのである。

ここに、ソクラテスの考えるソフロスネーと、クリティアスの考えるソフロスネーとの決定的な違いが現れてくる。ソクラテスはソフロスネーを、知的探求心を駆り立てる知のプロセスの中で考えていたのに対し、クリティアスはソフィストの流れをひいて知的権威とその従属者の構図の中で考えていた点が、違いとして重要である。

### III

以上のようにここで、ソクラテスは、ソフロスネーをクリティアスの考えるような自分の能力や才覚を知っているという自分についての知識としてでなく、むしろ自己探求を通じて断片化された自分を統合し、自分に対するアイデンティティの再確立に寄与するものと見なす。ソフロスネーは、倫理的実践的に行いに関わり、自分の行動や判断に関する問い返しである。この立場から、クリティアスとの違いが明らかになる。

ソクラテスは、「ソフロスネーとは知っていることと知っていないことを知っているだけに過ぎず、その他のことは何も知らない知である *οτι ἐπιστημῆς μόνον ἐστὶ καὶ ἀνεπιστημοσύνης ἐπιστήμη, ἄλλου δὲ οὐδενός* (174E)」からどうして有益になるであろうかとして、有益さを否定する。

ソクラテスにとり、ソフロスネーとは知っているかどうかという吟味を続ける姿勢であり、この吟味を続けるという努力自体が人間にとって生きるに値する生き方であると主張する。

ソフロスネーの規定をソクラテスは次のようにする。「ソフロスネーの心得のある人だけが自分自身を知っていることになり、何を知り、何を知らないかを調べ上げることが出来る。 *σώφρων μόνος αὐτός τε ἑαυτὸν γινώσεται καὶ οἷός τε ἔσται ἐξετάσαι τί τε τυγχάνει εἰδῶς καὶ τὴ μὴ* (167A)」そしてさらに、他の人が知っていると言うとき、何を知り、知っている以上は何を知っていると思っているか、また反対に、本当は知らないのに、何かを知っているかのように思っているか考察できる

ソクラテスはこの規定をもとに、三つの点を示す。一つは、ソフロスネーが生き方についての合理的考察と、また自分について知ることと関係を持つ点である。第二は、ソフロスネーが他の人が知っていると主張していることの吟味を伴う点である。第三に、ソフロスネーがソクラテスと対話者との両者において、未だに知られていないことは何かを確認していく力となる点である。

第一に、ソクラテスの規定では、ソフロスネーは、自分自身の探求という、人間として相応しい生き方を意味する。それはまた、探求の努力という、自分の生き方に対する道徳的な姿勢として強調されている。

ソクラテスの言うソフロスネーは、具体的な知る対象を持たない。医術が身体健康という知る対象を持ち、建築術が堅固な建物の構築という知る対象を持つのに対し、ソフロスネーは固有の対象領域を持たない。言い換えると、ソフロスネーは何か有益な現世的な利益をもたらさない。医術は健康という有益さをもたらす、建築は安定した住居という有益さを産み出すが、ソフロスネーは特別のこれと示される有益さを特定できない。「するとどうしてソフロスネーは有益になるのだろうか、いかなる利益の専門家でもないのに。(175A)」

この点でソフロスネーには、技術的知識に与えられるような有益さを計る判定基準が存在しない。技術的知識は役立つかどうか結果として確定できる。事実に関する知識なら、対象と照合して確認できる。治療が効果を発揮しないならば、その医術は有効ではないのであり、建てた建築物が崩壊してしまったら、その建築術は有効ではないのである。これに対し、ソフロスネーは有益さをもたらすものではないから、その有益さは事実を基にして確かめることができない。(169d-171c)

ソクラテスの言うソフロスネーは、自分に対する吟味を続ける姿勢である。それは自分の立ち姿という点で道徳的なあり方に関わるものとなる。その意味で、自分に世俗的な利益をもたらすものでないどころか、自分が納得できない考え方や行為を求められた時、その求めに逆らうという不利益すらもたらすものである。

第二に、知っていることは、他者との吟味を前提条件とする。前節で、クリティアスのソフロスネーが、社会的支配のために有益であるのに対し、ソクラテスのソフロスネーとは、自分の行いについての吟味をすることであることを明らかにした。ソクラテスのソフロスネーとは対象についての知識ではなく、自己省察がその過程であり、自らの行いを白日の下に曝し、他者との討議の中で、その行いの理由を明確にし、その妥当性を明らかにする過程である。そして、その過程を次の行いにフィードバックしていく。そしてさらにそのフィードバックされた行いをも、それを支える根拠と共に、他者との吟味の俎上に載せるというサイクルの中で産み出されるものである。いわば人が生きる限り、無限に続く試練である。

すなわち、ソクラテスによるソフロスネーは、何らかの対象についての静的な知識、百科事典に載っているような知識ではなく、動的な思考過程なのである。それは、自分が持っていると思っている知識を批判的に考察し、他の人々の知識との整合性を照会したり、内的な無矛盾性を確認することである。すなわち、ソフロスネーは自己と他人に対する吟味の姿勢で

ある。

これはソフロスネーの第三の点に関わる。ソフロスネーは自己吟味の活動であり、その真偽を決定する基準は、物理的現象についての知識の基準とは異なり、対象との一致を真偽の決定基準とすることはできない。その妥当性は社会状況の変化の中で、人々の置かれている多様な状況と照会して確かめられる。それは普遍的な正解を求めるより、繰り返し行われる自問自答、また、その結果を他者と確認するという過程であり、自分が道徳的に正しい選択をしているかという、自分に対する問いかけとしての知の有り様である。すなわち、問いかけと問い直しという連続の過程である。この点で、ソフロスネーは有益さという尺度では測れない。ソフロスネーは問いかけ、問い直しを続けるという姿勢であり、たとえ問いかけ問い直しの結果、合意が得られたとしても、それは一時的な仮説であり、常に反証される可能性に曝されているのである。「ソフロスネーが仮に今自分たちが規定したようなものにしても、それで善い作用を及ぼすと示すものは何もない。 *εἰ ὅτι μάλιστα τοιοῦτόν ἐστιν ἢ σωφροσύνη, οὐδέν μοι δῆλον εἶναι δοκεῖ ὃ τὸ ἀγαθὸν ἡμᾶς ἀπεργάζεται* (172E)」である以上、ソクラテスとの問答の結果、何も知らなかったことが解るというのは、人間の道徳的行為が、その時、その場面、その条件という一回性を持った選択であることを示すことでもある。行為の一回性という側面から自分の行為を考えた場合、自分の行為の選択結果がその時点で絶対の確実性を持つことはあり得ない。なぜなら、自分の行為がもたらす将来への影響を人間は完全に見渡すことは出来ないからである。

知ることの意味が、そこから何かの利益を得ることであるとしたら、確かにソクラテスの活動は無駄な活動であろう。だが、ソクラテスの活動が、選択に伴う自分の判断の限界と、それでも一つの行為を選び行うという責任を明確にしていくものであると考えるならば、意義あるものである。それは、見返りを求めず、自己に誠実に向き合う姿勢を求めてくる以

上、厳しいものである。

#### IV

ソクラテスは、クリティアスの有益さを求める知を越えて、知らないことを知らないと思う吟味を自覚的に続けるという知り方を探る。この知り方は、自覚を求めるものだけに、学びにも必然的に関わる。「人はソフロスネーを心得ることにより、何を学ぶにしても、学びはもっとやりやすくなる。ὄτι ὁ ταύτην ἔχων, ὅτι ἂν ἄλλο μανθάνῃ, ῥᾶδόν τε μαθήσεται (172B)」。学びにより、思い違いをしているのに知っていると思いこんでしまったり、またそれを、そのまま自分の行動に適用してしまう過ちを減らすことができる。

カルミデス篇を読む現代の私たちは、ソクラテスを中心に、カルミデスやカイレポンと交わされた吟味において、克己節制が何であるかは見つけ出すことができなかつたという、結論に到達できないままで書を閉じることになる(176A)。しかし、結論に到達できないとしたら、何か吟味の過程を通した学びの成果として残るのか。吟味の結果が、体系的知識の習得という結果に集約されなくては、学んだことにならないと考える限り、結論に到達できないという結果は学びの不成功となる。

知の吟味とはそれよりむしろ、自己知識を産出するための手ほどきである。それは正解としての結論へと導く過程の援助ではない。知の吟味は、変化する世界の中で自分の論拠を問い直す契機を与え、自分に向かい合い、自分への問い直しを促すことである。そこでは知識は知識として成立する条件を満たしているかどうか、またその条件そのものが妥当であるか、この意味での克己節制というソフロスネーを持ち知に対峙しているかどうか問われ問い続けることになる。それは自分自身を制御する術を学び、不断の吟味を続ける姿勢を学ぶ過程を共にすることなのである。

上にあげた学びは、テアイテス篇で説明された産婆術の方法と参照す

ると明らかである。

テアイテトス篇では、知識という鳥を集めた鳥小屋として心を考えようとソクラテスは提案する。「それぞれの心にいわば鳥小屋を作るとしようではないか *νὺν αὖ ἐν ἑκάστη ψυχῇ ποιήσωμεν περιστερεῶνα* (197D)」。この知識という鳥を私たちは様々な状況で多様な仕方でも集めて、心の中に入れていく。ソクラテスにとり、知識とはただ単に捕獲され保持されるだけでなく、それを応用できる形で能動的に把握しているという意味を含めて用いられる。それはちょうど一度捕まえた鳥を鳥かごの中に入れ、必要な時にはいつでも、それを取り出して示すことができなくてはならない状態として比喩的に喩えられる。言い換えると、単に所有しているだけでなく、それを自由自在に適時に使いこなすことができるレベルまで含まれる。

しかし、知識が十分に整理確立されて理解されていないと、間違いが生じる。例えば、鳥小屋の中から燕を捕まえて取りだしたつもりが、雀だったというような時、間違いが生じる。「例えば、普通の鳩の代わりにモリバトを捕まえるようなものである *λαβὼν τὴν ἐν ἑαυτῷ οἷον φάτταν ἀντὶ περιστερᾶς* (199B)」。

この鳥小屋モデルが示唆するもう一つの点は、中に「様々な種類の鳥が入れられ、自分たちだけで大群を為しているもの、小群を為しているもの、単独で他の鳥の間を飛び回っている類のものなど *τινα παντοδαπῶν ὀρνίθων τὰς μὲν κατ' ἀγέλας οὐσας χωρὶς τῶν ἄλλων* (197D)」がいて、多様な分類が可能である点である。群れ同士の違いがまず存在する。それと同時に、群れの中の個体間にも差異がある。この多層的な違いを明らかにすることがソクラテスの対話篇の中で大きな役割を持っていた。ここでは知識はその妥当性を吟味され分類されていく。その結果が漸進的に知識の整理へと繋がっていく。

この鳥小屋モデルは、私たちの知識は幼児期には空いていた鳥小屋の中

に知識という鳥を納め始めるようなものであると考える。「人が幼い時には小屋は空であると言わねばならないが、鳥を知識と置き換えて考えてみよう……知識しているとはこのことなのだ *Παίδιον μὲν ὄντων φάναυ χρῆ εἶναι τοῦτο τὸ ἀγγεῖον κενόν, ἀντί δὲ τῶν ὀρνίθων ἐπιστήμης νοῆσαι . . . το ἐπίστασθαι τοῦτ' εἶναι* (197E)」。]

知の吟味とは、この鳥小屋モデルに立脚して考えると、日頃から鳥小屋の中に納め貯えてきた様々な種類の鳥を分類し、それぞれの特徴と類似性を吟味して、整理していく学びの姿勢として見る事が出来る。それは人々が成長と共に獲得してきた知識を整理し、世間でも通有するような普遍性を持つかどうか吟味する。言い換えれば、思想的胎児を導きだし、出産前の胎内で保護されていた状況から外界での厳しい環境の中でも十分に通用していくかどうか、吟味を通じて手ほどきしていく過程である。「さてそれなら、知識を鳥の捕獲や所有になぞらえながらこう主張することができる。……このことは人が学んでその知識を既に以前から自分の物としていた、すなわち自分の知識にも当て嵌まるものであつて、もう一度この同じものを学び返すのである。それはちょうど知識を前から所有していたものの、ただちに応用理解できるような形で所持していなかったものを、改めて理解し応用できるようにする学びの場なのである *Οὐκοῦν ἡμεῖς ἀπεικάζοντες τῇ τῶν περισσετέρων κτήσει τε καὶ θήρᾳ ἐροῦμεν . . . ἔστι καταμανθάνειν ταῦτα ταῦτα ἀναλαμβάνοντα τὴν ἐπιστήμην ἐκάστον καὶ ἴσχοντα, ἣν ἐκέκτητο μὲν πάλαι, πρόχειρον δ' οὐκ εἶχε τῇ διανοίᾳ* (198C-D)」。そこで、不十分な整理しかされていなかった知識は、知ついても未だ知つていないとは言えない知識として分類される。ここに知らないことを知らないと思う知のあり方がある。同時に、それは整理比較の後、既知の知へと変化する可能性がある。すなわち、「知らないことを知らないと思う」吟味を続けるとは、未知から知へと進む際の、知的誠実さの姿勢、ソフロスネーという姿勢である。

ここでソクラテスが産婆術という方法を学びの場と考えていたこと、また学びという言葉がテアイテトス篇ではカタマンサネイン *καταμανθάνειν*、メタ認識としてに留意しなくてはならない。ソクラテスにとり、知っているかどうかの吟味は知識の吟味というメタ認知である。自分の知識を他の人の知識と比べ確認する。この吟味の中で優劣は最初から定まっているわけではない。それだけに知っていることについて、ソフロスネーという自分自身への厳しい姿勢を必然的に包含していくことになる。ここに、克己節制という自己に対するあり方が求められる。

## V

ソクラテスはアテナイでの活動を、自分の母、ファイナレテの仕事に準えて産婆術という言い方で呼んでいる。その仕事はテアイテトス篇の最後に述べられるように「若くて上品なおよそ器量のすぐれた男達の産を助ける *ἐγὼ δὲ τῶν νέων τε καὶ γενναίων καὶ ὅσοι καλοί* (210C)」, すなわち、若い人々が知的な活動に際し、円滑に自分の意見を纏めて、普遍的な妥当性を持つように思想形成していく手ほどきをする仕事として説明される。産婆役が出産という重要な節目に立ち会い、円滑に出産が進むよう手助けするという仕事に比較されている。もちろん産婆役が出産後も母子の回復と成育を手ほどきしていくように、形成された思想の整理、吟味にも続けて携わっていくことになる。

この点をカルミデス篇で主題となっているソフロスネーと対比すると、ソクラテスの産婆術の意味が明白になる。産婆術とはそれぞれの人が持つ自己吟味の働き、すなわち、自分の知識を一つずつ取り出し、他者の知識と比較し、その整合性を確認し、再び自分を整理し直すという過程であることが明らかになる。それは知識の教授という結果、伝達事項を受け取るという仕方とは異なる、自己吟味の過程への手ほどきという学びのあり方である。

産婆術という方法はその理論的な根拠として、弁明篇の「知らないことを知らないと思う *ὄτα ἄ μὴ οἶδα οὐδὲ οἶομαι εἰδέναι* (21D)」吟味を行うというソクラテスの主張に基づく。もとより、この主張はソクラテス自身による自己言及、「私は自分が大にも小にも、知恵のあるものなんかではないのだということを自覚している *ἐγὼ γὰρ δὴ οὔτε μέγα οὔτε μικρὸν ξύνοιδα ἐμαντῶ σοφός ὢν* (21B)」と述べるところを代表として、随所で語られている。

このような態度は必然的に論理的一貫性、自律性、客観性、自省的态度、公平性、自己超越の態度、いわば脱我、を含む。カルミデス篇のソクラテスは言う。「論駁されて討論に負けるのは自分でもクリティアスでもどちらでも構わない *ἔα χαίρειν, εἴτε Κριτίας ἐστὶν εἴτε Σωκράτης ὁ ἐλεγχόμενος* (166E)」。

吟味は訊問とは異なることには気を付けないといけない。訊問とは訴訟などに対し、強制的に返答を求めることである。吟味はこのような強制的な関係にはない。ソクラテスの吟味の特徴は吟味に加わる参加者が吟味に加わること自体に同意している点である。教え込みではなく、吟味ではまず自分の言葉として表明し、それを自分から進んで整理し主張していくことが求められる。自らの思考や行動を、自らの能動的な管轄下におくというメタ認知を踏まえ、自分で納得して自説としていくことなのである。これは自分自身で自分の考えや行いを吟味し、自分自身が納得しつつ、知識を形成していく過程である。ソクラテスの産婆術は吟味の過程を通じて、自分自身を試練に曝し、自らの内に自分自身を吟味する中枢センターを作るようなものである。そこには個々の判断や行為を吟味し、正当性を確認し、一貫した統一的な構成のもとに位置づけていくという統轄本部のような働きがある。

これは自分自身で自らの考えを確立していくことを前提とする。もちろんその時、その吟味へのきっかけとして他者の存在が有意義なことはある

う。しかし本質的にこの過程は自己吟味の過程である。自分自身の言葉として表明した時初めて、ソクラテスの吟味は成り立つのである。それはアルキビアデス 1 篇で、ソクラテスが解答を求めている、アルキビアデスに対する確認に示される。ソクラテスは言う。「君は何より納得を求めているのではないか。……それなら君は自分でこれはこうだと思ようになった時、最大限の納得ができたことになるのではないか *οὐχ ὅτι μάλιστα βούλει πεισθῆναι; ... Οὐκοῦν εἰ λέγοις ὅτι ταῦθ' οὕτως ἔχει, μάλιστ' ἂν εἴης πεπειαμένος;* (114E)」。ソクラテスのこの主張は自己吟味は自分の主張の一貫性を確認していくプロセスであることを示している。

その自己吟味とは、情け容赦なく自己を赤裸々にし自己に直面する修行をしていくようなものである。それはむしろ、自分自身を荒野に向かわしめ、自分の生身の能力を試練に曝すようなものである。

ソクラテスの言う自分自身を知るとは、自分自身を司り、自己統制を行うという意味である。ここには、自分自身を客観的に見て自己吟味していくという批判的な過程と同時に、その吟味に基づいて実際の生活の中で、徳のある行為を実践していくという両側面が含まれる。ソクラテスにおいては実践と理論的吟味とは車の両輪なのである。

この自覚がソクラテスを産婆術へと向かわせる。自分が知らないことを知っていると思ってしまったその時点で、知への探求は停止する。テアイテトス篇で示された、自分の鳥小屋が、完成されたものであり、最も優れたものであると考えること、すなわち、知恵があると思うのは、自分が未熟であることの忘却に繋がる。産婆術は自分を含め、人間として持つことのできる能力の限界を明るみに出すことである。

それは自分自身を問うという姿勢であり、常に反駁可能性を意識し、一人ひとりの個別の特定の条件下で自己省察を行うことである。そこには誰にでも当て嵌まる普遍妥当な公式は求めがたい。期待できるのは道しるべとしての、他の人々との吟味の中で得られる確認であり、誤謬の指摘、反

駁、修正、純化、さらなる誤謬の指摘のサイクルである。その際に、吟味し決定していくのは己れである。その意味で何より、自分自身に対して、自分の決定が誤謬であるかもしれないという覚悟を求めるものである。ソクラテスは「なぜそれを知っていると言えるのか」という問いを繰り返し提示してくる。すなわち、自分自身に対して、自分が未だに根拠となる理由を持たずに知っていると思いこんでいるのではないかと、自ら問い続けることを求める。同時に、これは自分の知識が不完全で、しかも間違っただけかと思ひこみのもとに行動していたのではないかという不安ももたらす。

産婆術はソフロスネーを求める。常に自己吟味を怠らない、克己節制の努力を続ける姿勢を求める。自分の行いや自分の持つ考え方に対して、それを対象化し、常に正しいかどうか問い続けることを求める。行動に際し、自分の選択した方向が正しいかどうか、その理由は適切かどうか問い続けることでもある。自説の説明に際し、科学に関するものであれ、政治経済に関するものであれ、日々の生活についてであれ、その論拠と妥当性を問い続けることになる。産婆術では自分が知らないことを知らないことと確認されるだけではない。「知らないことを知らないと思う」ためには、「知っていることと知らないことを知っている」と思いこんでいるのではないかというメタ認知が求められてくる。

## ま と め

ソクラテス以前は「どう教育するか」が問題であった。ソクラテスはこれに対し、「知っているとは何を意味するのか」「知っているとどうしていえるのか」という全く性質の異なった問いを掲げて産婆術を実践した。産婆術が人々に働きかけるものならば、教育活動として位置づけられる。すなわち、ソクラテスは産婆術を通じて、知を問い、知を手ほどきする教育の意味を問うた。これは教育に関する問題そのものを自覚的に対象化し、その対象を吟味に曝し、正当性を確証する必要を提起したものである。い

わば、教育現実に対し、メタ認識を求め、そのレベルで自己吟味を続けるという教育哲学を提示したと考えることができる。

すなわち、ソフロスネーが知らないことを知らないと思うだけの思慮を持ち、自分に対する克己節制の態度を持ち続けることを意味するならば、教育哲学は教育という働きかけに対して、知らないことを知っているとしている思い込みを吟味し、知らないことを知らないと思うという自覚を促す役割を持つ。言い換えれば、教育哲学は、教育活動に際し、自分と人に対してソフロスネーを求めるところに、その出発点と存在意義を持っている。ここに、教育哲学という探求の意味が示されてくる。特に、今日、学校で教えられる知の有り様が、学校という枠組みの中で自己を位置づける「知っていることと知らないことを知っている」という静的な仕組みの中で用いられていることと対比するならば、不断の吟味という探求の姿勢は、学校で伝達されるべき知の有り様の重要側面として見直されるべきである。

#### 註

- 1) 山野耕治他訳『プラトン全集 7』(岩波書店, 1975) 239 頁。なおカルミデス篇については、「カルミデス篇について英語で書かれたものは多くはない」という指摘がある。Hyland, D., *The Virtue of Philosophy*, (Ohio U. P., 1981) p. ix. また、Schmid は今日なおカルミデス篇についての注目度は他の対話篇に比較して低いとしている。Schmid, W. T., *Plato's Charmides and the Socratic Ideal of Rationality* (State University of New York, 1998), p. 169.
- 2) ソフロスネーの訳は「克己節制」あるいは「思慮の健全さ」と訳されている。ソフロスネーは当時のギリシア人にとり、徳目の一つとしてあげられるものであるが日本語に即応する訳語はないという指摘がある。山野耕治他訳、前掲書、245 頁。
- 3) このような位置づけを行うことは、ソクラテスの知識論について従来の解釈と異なることを示すことにもなる。村井実のように産婆術についての教育学的解释は従来、ソクラテスがエロスの存在として人間を捉えていたとする人

間観に立脚している解釈し、そのエロスの働きを喚起し、善いものを産み出す中に教育が成立すると解釈された。村井実『ソクラテスの思想と教育』（玉川大学、1972）94頁。この解釈はプラトン中期作品群の内、饗宴篇を中心に論じており、初期対話編でのエロスという用語の使用頻度の少なさに比較した場合、中期に立脚したソクラテス解釈であり、初期ソクラテス解釈からの純度は薄れると考える。

さらに、カルミデス篇での産婆術は、一つ一つの主張が吟味され、その論拠を確認していき、続いて別の候補が提出され、それも吟味されていくという過程を積み重ねて行われる。その際に、演繹されてくる命題の妥当性、比較、類比、などを通じて、主張の妥当性が確認されていく。この吟味は考察の俎上にあげるところまでで終わり、それ以上には取寄進まない。それぞれの主張は結果として、自己矛盾に陥り、主張していた本人がソクラテスの吟味で自分の主張が行き詰まり、言葉に詰まるという袋小路、アポリアに追い込まれる。言い換えれば、結論の保留に留まることになる。すなわち、そこから先は吟味に参加している当事者、そして対話篇を読んでいる読者に委ねられる。それは産婆術をエロスの働きを育て生産すること *τοκος* として捉える村井の立場では、なにも生産しないままに置かれた状態に留められることとなる。村井実『ソクラテス上』（講談社学術文庫、1977）、163頁で、産婆術はエロスの働きを助け、「美しいものの中で生産すること *τοκος*」(前掲書、166頁)として、産婆術は生み出すこととしている。

また岩間によると、ソクラテスの「知の知」とは善悪についての知であるとされ、本論の自己探求の知識とは異なる解釈に則っており、村井と同じ批判があたる。岩間秀幸『ソクラテス研究』（コモンヒルズ、2001）298頁。

さらに中澤はソフロソネーの読み方について今までの読み方を批判する。中澤努『ソクラテスとフィロソフィア』（ミネルヴァ、2007）277頁。クリティアスの言うソフロソネーはソクラテスの考え方と正反対であるとして、「汝自身を知れ」という箴言の解釈から自分の力量認識として捉える見方を中心に述べているが、本論はカルミデス篇の主眼は知の吟味であるととらえ、論を進める。

- 4) ソクラテスはまずソフロソネーとは何であるかについてカルミデスに定義の提示を求める。しかしカルミデスが自らの内面を観察した結果でなく、ソフロソネーのあると言われる人々の行動の様態を観察し、それを一般化することによって定義、いわば辞書の定義を述べた。

まず物静かさという定義はすばやく行うほうが見事な行為もあるという理由によって、簡単に論駁されてしまう。次の定義も同様である。恥を知る心

という定義も当時の容認されている特性の観察によって取り出された特徴である。それ故、この定義もまた恥を知る心は場合によってはよくないものでありうるという単純な理由によって却下されてしまう。

最後の定義については、自分のことだけをしているべきであるなら、読み書きも技術的な仕事も成り立たなくなると反駁される。

- 5) この有益さは行為がもたらす結果としての得失であり、行いそれ自体が持つ善悪の判断ではないと中澤は言う。中澤、前掲書 273 頁。
- 6) 廣川洋一『ギリシア人の教育』（岩波書店、1990）16 頁。
- 7) クリティアスがソフロスネーという徳をこのようなものとしてとらえる理由は、彼の潜在的な性格から理解することができるであろう。彼は哲学の中ではなく、むしろ政治の中で生きてきた人間であり、後には二千人政権における重要なメンバーとなり、独裁政治をおこなった人間であった。結局、彼にとってのソフロスネーは政治の中で活用される徳なのである。何よりもまずこのようなクリティアス自身の政治的立場の特殊性に、クリティアスの主張は起因している。その意味で「知識の知識」への議論の逸脱は決して無定見なものではなく、クリティアスにとって明確に定式化されているのである。そして、ソクラテスはそれを見抜いたうえで、反論しているのである。
- 8) 中澤はクリティアスとソクラテスが善悪の問題を対立軸としていたとしている。中澤、前掲書、272 頁。しかし本稿はソクラテスが問題としては自己吟味を追求する自己のあり方であると考ええる。
- 9) Schmid, *ibid.*, p. 43.

## 付 記

プラトンの著作の引用は、岩波書店刊『プラトン全集』を参考に *Loeb Classical Library* によった。また引用、参照の末尾の数字はステファヌス版全集 (H. Stephanus, *Platonis Opera Quae Extant Omnia*, 1578) のページ数と各ページの段落づけに対応している。